様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２０３５３

研究課題名（和文）近代中央アジアの多民族社会と帝国の統治：新疆イリ地方の事例から

研究課題名（英文）Imperial rules and Central Asian multi-ethnic societies: Cases of the Ili district in Xinjiang

研究代表者
野田　仁（Noda, Jin）

早稲田大学・高等研究所・准教授

研究者番号：００５４９４２０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀後半～20世紀初頭の露清帝国の文書史料を調査・分析することによって、新疆イリ地方を中心とする中央アジア諸集団の紛争解決の事例と、帝国側の多民族統治政策との相関を検討した。ロシアによるイリ地方統治期を経て、国境画定条約とそれらを補う交渉・議定書策定を通じて諸民族集団の国籍・帰属はより明確になった。このような変化と並行して、当該の地域において露清両国にまたがる国際的な紛争の解決のために、現地の慣習法を参照しつつ、諸民族集団も交えた三者間での合議による裁定が制度として確立していった。

研究成果の概要（英文）：This research project, analyzing the Russian and Qing archival documents during the second half of the nineteenth century and the beginning of the twentieth century, examined the cases of the dispute solutions among the Central Asian ethnic minorities (mainly Kazakhs, here) in the Ili district in north Xinjiang. Investigating the imperial policies for the multi-ethnic people regarding their nationalities as well, the project portrayed that the three parties (Russian and Qing empires, and local ethnic groups) could established the new trial system in which the three parties solved together the international conflicts beyond the border, even with referring to the local customary law.

研究分野：中央アジア史

キーワード：ロシア　国際関係史　新疆　カザフスタン　清朝

１．研究開始当初の背景

(1)現在の中国新疆ウイグル自治区北部に相当するイリ（伊犂）地方は、古来より遊牧民の牧地が広がる地であった。しかし、18 世紀半ばにジューンガルの勢力が清朝によって滅ぼされると、この地は清朝の新疆統治の要となり、満洲・蒙古の八旗兵、シベ・ソロンの屯田兵が移住したほか、農耕に従事するために新疆南部のイスラーム教徒が強制的に移住させられタランチと呼ばれるようになっていた。1860 年代になると清朝西北全体に広がったイスラーム教徒の反乱を期に混乱を極める。民族構成の点では、西隣のロシア帝国領との間でカザフ・クルグズの遊牧民たちが移動を繰り返し、イリ地方はさらに複雑な構造を持つようになった。そのような状況下で成立したタランチによるスルタン政権も長くは続かず、逆にロシアの介入を招く結果となった。

(2)このような多民族で構成されるイリ地方について、従来の研究は、ロシアと清朝の国際関係の視点から地政学的に説明し、むしろ、イリ地方をめぐる両国の外交交渉やその結果としての条約について議論することが多かった（中国の厲声やロシアの Voskresenskii の研究がある）。しかし、そのような手法では、この地域に住む人々について具体的に考察することが難しいことは明白であった。イリ地方、とりわけ 1871 年から始まるそのロシア統治時代については、例外的に多くの史料が残されており、たんに帝国間のパワーポリティクスの中に近代中央アジアを位置づけるだけではなく、社会の構造をも示すことが可能になる見通しがあった。

(3)他方で、研究代表者は先行する研究課題において、近代中央アジアの諸民族（カザフ・ウイグル・クルグズ・ドゥンガン（回民）等）の移動とそれらを取り巻く帝国の領域との相関関係を明らかにすることを試み、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、露清間の国境を越えて移動していた諸民族の帰属と民族意識形成の問題を検討していた。そこで鮮明になった課題は、紛争という形で表れる民族間関係である。民族間の係争は、多民族が比較的狭い空間に共に生きる中で、異なるエスニシティー間で接触が起こり、それが逆に民族としてのアイデンティティー形成に影響を及ぼし、多民族社会へと展開する契機となっていたという点で大きな意味を持っていると考えられる。

２．研究の目的

(1)上に述べた背景を踏まえて解決すべき課題を設定すれば、イリ地方における多民族間関係、とりわけ彼らの間の紛争とその解決の過程を明らかにすることがある。さらに、ロシア帝国の現地統治機関であったイリ地方官房が、また清朝への返還後は伊犂将軍府がどのように多民族社会を把握し、問題の解決を図ろうとしていたのかも見逃すことができない。このような視点から 19 世紀後半から 20 世紀初頭にいたるイリ地方に居住した諸民族の動向を分析することによって、社会統合の実例を明らかにし、すでに研究代表者が考察を進めてきた民族アイデンティティーの形成に結びつく集団意識をも考察することができると考えられる。

(2)以上を整理すると、多民族で構成される地域において、それぞれの集団のアイデンティティーが確立される中で、各集団が共生のために紛争を解決する実態を、集団同士の交渉および統治主体である帝国の政策の両面から明らかにすることが本研究の目的となる。

３．研究の方法

(1)本研究は、新疆イリ地方の歴史に着目し、史料が集中的に残されているロシア統治時代（1871-1881 年）および清朝へ返還された後の時期（～1910 年代）について、当該の地方が抱える多民族間の共生の事例を検討する。そこでは、住民の生業の分析、土地所有や水利権をめぐる民族間の紛争の事例収集、裁判記録における紛争解決の事例の分析、露清帝国の多民族統治政策の検証が具体的な検討課題となる。これらの作業を通じて、近代中央アジアにおける社会統合についての新たな像と、そのための諸条件を示すことを念頭に置いていた。

(2)手法としては、ロシア当局による行政文書史料を調査・整理・分析し、その中に含まれる請願・訴状などの内容を抽出することを通じて、イリ地方に居住していた諸集団（カザフ、クルグズ、トルグート、オイラト等の遊牧民と、タランチ、ドゥンガン、シベなどの農耕民に区分できる）の間で問題となった土地所有、財産をめぐる紛争の事例を収集し、その解決に至る過程を明らかにするものであった。

(3)その際に、各集団の生業に留意した。とくにカザフをはじめとする諸遊牧集団の遊牧のあり方とその牧地を確定することは、さまざまな集団が遊牧地の支配をめぐって紛争を繰り返していたイリ地方のケースを分析する上でも重要な意味を持っていると考えられるからである。

４．研究成果

(1)本研究では、19 世紀後半～20 世紀初頭の露清帝国の未公刊文書史料を調査・分析し、すでに公刊されているロシア・清朝の歴史史料とも比較しながら、イリ地方を中心とする中央アジア諸集団の紛争解決の事例と、帝国側の多民族統合・統治のために施された政策との相関を検討した。具体的な史料調査実施地は、カザフスタン共和国アルマトゥ市（国

立中央文書館)、台北市（故宮博物院および中央研究院)、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、筑波大学が主であった。なお、スラブ・ユーラシア研究センターにおいては帝政ロシア時代の出版物についても整理を行う機会を得た。ロシア帝国の文書史料については、当然ロシア国内にも複数の所蔵機関があり調査対象に想定していたが、本研究における調査の結果、司法・裁判に関連する文書史料が思いのほか多くカザフスタン国立中央文書館に残されていることが判明し、まず同文書館史料から精査を行うことを優先することとした。本研究の成果、和文・英文によって論文あるいは図書の一部という形で公けにしたほか、論文化を視野に入れながら口頭報告を行い、国内外の研究者との共有をはかっている。

(2)平成２３年度は、イリ地方の諸集団の間でもっとも紛争につながりやすかった土地所有・境界線の問題を考察するために、各民族集団がそれぞれどのような規模で遊牧ないし農業を展開し、どこに遊牧地・農地を持っていたのかを考察した。ロシアによるイリ統治時期の諸集団の動向について改めて整理を行った上で（”The Ili (Kulja) Region under the Russian Empire in 1871-1881”)、これまで収集してきたロシア帝国文書に加え、イリ地方が清朝の統治下に入った１８世紀後半以降の清側の文献、文書史料の整理を行った。整理の過程では、露清両国の経済的な関心とそれに関連する政策が明らかになった（“Russo-Chinese Trade through Central Asia: Regulations and Reality,” T. Uyama ed. Asiatic Russia, pp. 153-173)。これらの作業を通じて、とくにカザフ人の生業である遊牧・牧畜について、移動の実態、19 世紀における政治的変容、遊牧地の展開の規模にかんして具体像を示すことができた（「歴史の中のカザフの遊牧と移動」承志編『国境の誕生』2012、169-206 頁)。

(3)平成２４年度は、カザフスタン国立公文書館における調査を行い、ロシア帝国がイリ地方を統治していた期間の行政文書の調査・収集を行った。イリ地方の司法・裁判にかかわるものが多くを占めることが判明し、住民からの訴えをロシア帝国が現地の慣行とも照らし合わせながらどのように解決しようとしていたのかを示す貴重な史料となることがわかった。またロシアは民族間の紛争にも積極的に関与し、地域の安定化に努めていたことも文書史料から明らかになる。前年度に整理した情報と合わせて、ここから明らかになった裁判の具体的な過程を元に、イリ地方における司法制度の解明、さらに露清関係の中で司法制度が果たした役割などについて考察を進めた。主な成果として、カザフを中心とする遊牧集団に対する帝国の関与について（“Empires and the Steppe”)、また、上述のロシア帝国が設定した新たな司法制度が現地住民の国籍の選択に及ぼしていた影響について口頭報告を行った（「19 世紀後半の新疆における露清間国境について：紛争解決と帰属の問題」東アジア近代史学会第 136 回月例研究会)。

(4)平成２５年度は、カザフ遊牧民における司法制度を、長く用いられてきた慣習法と、ロシア法、イスラーム法との接点に焦点を当てて、全体像を把握する作業を行った（「カザフ遊牧民の「慣習法」と裁判―ロシア統治期イリ地方の事例から見る帝国の司法制度と紛争解決―」（堀川徹ほか編『シャリーアとロシア帝国』78-102 頁)。その整理を受けて、ロシア・清・中央アジア諸集団の間で行われていた国際集会裁判（S’ezd）に注目し、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてこの地域の秩序安定化に対してこの裁判制度が果たしていた役割を明らかにした。またこの時期のイリ地方に対して、ロシア・清以外の勢力による関心を検討し、とくに近代日本の視点からこの地域がどのように注目されていたのかを明らかにした。

(5)平成２６年度は、これまでの成果も踏まえ、両帝国間の紛争にかかわる司法的処理の過程を詳細に分析した。それにより、司法手続きの中で明確にされる国籍に対する認識を明らかにできた。その上で、カザフスタン国立公文書館等における追加調査を行い、1871 年～81 年のロシア帝国によるイリ地方占領期を中心として、占領前、返還後の３つの時代区分を設定し、司法手続きを繰り返す過程において、各集団の所属意識がより鮮明になる中で、露清両帝国の思惑と現地諸集団側の意識・帝国への忠誠度との乖離が明確になった。

(6)全体として、本研究が明らかにした主要な内容は以下の三点にまとめられる。①多民族集団で構成されるイリ地方について、その経済的重要性、また交通・戦略の拠点としての重要性は高く、19 世紀末には英国や日本からも大きな関心が寄せられほどであった。この地域の諸集団に対して、主要なアクターである清とロシアは、それぞれの手法で影響力の行使に努めていた。②そのような帝国側のアプローチに対して、中央アジアの諸民族集団側は、環境や政治状況に応じて、ときに越境し、帝国の支配秩序から逸脱しようとすることもあったが、国際条約による国境画定と、それらを補う交渉・議定書策定、さらに次に示す司法制度の整備を通じて、国籍・帰属が明確になっていった。③ロシアによるイリ地方統治期を経て、この地域とその周辺をめぐる紛争においては、帝国側の主導であったとは言、現地の集団も交えた三者間による合議という形をとって、裁判により紛争を解決することが志向されていた。

(7)本研究では、紛争解決のプロセス解明に注力したため、司法制度の全体像はまだ不明なところも多く、このような取り組みがどのように地域の安定につながり得たのか、あるいは社会の安定化をもたらしたのかという点についても、今後の課題として残されている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 野田仁、日本から中央アジアへのまなざし―近代新疆と日露関係―、イスラーム地域研究ジャーナル、査読無、6、2014、pp. 11-22、http://hdl.handle.net/2065/41456

② 野田仁、帝国の境界を越えて―露清間の境域としてのカザフ―、歴史学研究、査読無、911、2013、pp. 10-18

〔学会発表〕（計５件）

① 野田仁、帰属・国籍の変更と帝国への忠誠－カザフ遊牧民の民族的アイデンティティとの関連から、早稲田大学高等研究所セミナーシリーズ【研究エリア〈新しい世界史像の可能性〉】シンポジウム「１８～１９世紀の中央・東アジアにおける民族的アイデンティティと国家への忠誠」、2014.10.18、早稲田大学（東京都新宿区）

② 野田仁、帝国が見るカザフ遊牧民の土地と家畜：19 世紀の紛争解決の事例から、日本中央アジア学会年次大会、2014.3.29、KKR 江ノ島（神奈川県藤沢市）

③ 野田仁、帝国の境界を越えて：露清間の境域としてのカザフ、2013 年度歴史学研究会大会全体会「変容する地域秩序と境域：中央ユーラシアと蝦夷地の経験から」、2013.5.25、一橋大学（東京都国立市）

④ Noda Jin, Empires and the Steppe: A comparative study on Qing and Russian empires, 2012 Summer International Symposium: “From Empire to Regional Power, between State and Non-state,” 2012.7.5, Slavic Research Center, Hokkaido University (Sapporo)

⑤ Noda Jin, The Ili (Kulja) Region under the Russian Empire in 1871-1881, Scientific workshop: “Toward a Sustainable Society for the Future: Dialogues in Almaty,” 2012.1.10, Almaty (Kazakhstan)

〔図書〕（計４件）

① 野田仁　他、中国新疆のムスリム史―教育、民族、言語―、早稲田大学アジア・ムスリム研究所、2014、50

② 堀川徹、野田仁　他、シャリーアとロシア帝国：近代中央ユーラシアの法と社会、臨川書店、2014、309

③ 承志、野田仁　他、国境の誕生、臨川書店、2012、268

④ Uyama Tomohiko, Noda Jin et al., Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts, Routledge, 2011, 296

６．研究組織
(1)研究代表者
野田　仁　(NODA, Jin)
早稲田大学・高等研究所・准教授
研究者番号：00549420